

## 「インチュニアのデザインの遺伝子を 決定したのは、ジェラルド・ジェンタでした」

1970年代、有名な時計デザイナーのジェラルド・ジェンタがIWCシャフハウゼンのためにインチュニア SLをつくりました。このたび、このスイスの高級時計メーカーは、伝説と化しているこのデザインに磨きをかけて現代的な解釈を施し、わずかなディテールにいたるまで完璧な、インチュニア・オートマティック 40をつくりました。しかし、この新しい自動巻きモデルは、オリジナルモデルの大胆な美的な特徴とユニークな性格を受け継いでいるだけでなく、同時に人間工学、仕上げ、技術に関する最高の基準もクリアしています。長年にわたる開発プロセスを、IWCチーフ・デザイン・オフィサー、クリスチャン・クヌーブが振り返ります。

IWCシャフハウゼンがインチュニアを発売したのは、1955年のことでした。このコレクションは、どのような重要性があるのでしょうか？

インチュニアは、他のどの時計よりも、IWCのエンジニアリング精神や、このブランドの技術的に厳密でデザイン重視のアプローチを体現しています。もともと、職務上、強力な磁場にさらされるエンジニア、物理学者、医者などの専門職の人々向けに開発されました。最初のインチュニア (Rf.666) は、技術的なマイルストーンとなりました。搭載されたのは、IWC社内で開発された初の自動巻きムーブメント、キャリバー8531で、効率性に優れたペラトン巻き上げ機構を組み込み、軟鉄製インナーケースによってムーブメントを効果的に磁場から保護していました。この技術は、もともと1948年に英国空軍のために開発されたプロ仕様のナビゲーション・ウォッチであるパイロット・ウォッチ、マーク11のために開発されたものです。

インチュニアが発売された頃は、どのような時代でしたか？

1950年代は、人々がテクノロジーに魅了され、エンジニアリングは革新、進歩、繁栄を体現していました。当時、エンジニアリングの成果によって、新しい形の建築やデザインの基礎が築かれ、あの時代の多くの製品や日常用品に繰り返し用いられました。こうした楽天的な感覚と、多くの人々が技術的進歩を信じる気持ちは、新しいウォッチファミリーに選ばれた「インチュニア」という名前にも表れています。「インチュニア」はフランス語で「エンジニア」を意味し、ドイツ語でも使われています。

1976年、IWCは徹底的に見直しを加えた新しいバージョンのインチュニア、インチュニア SLを発表しました。デザインしたのは、有名なジュネーヴの時計デザイナー、ジェラルド・ジェンタでした。ジェラルド・ジェンタの仕事は、どのような点で群を抜いていましたか？

1950年代に発売された初代インチュニアは丸型で、むしろ控えめなケースでした。ジェラルド・ジェンタの見事な貢献により、このウォッチはついに「顔」を獲得しました。インチュニア SL (Rf.1832) のために、ジェラルド・ジェンタは、5個の凹みのあるねじ込み式ベゼル、格子模様の文字盤、H型リンクを組み込んだ一体型ブレスレットなど、大胆な美的特徴を採用しました。これにより、このウォッチは独特な特徴を備えるようになり、即座に識別することが可能になりました。こうしてジェラルド・ジェンタは、いわば製品遺伝子の戦略的発展を成し遂げたのです。このような顕著な識別可能なデザインの特徴があったからこそ、IWCはジェラルド・ジェンタの芸術的な特性を失わずに、長年かけて少しずつインチュニアに変更を加えていくことができたのです。

ジェラルド・ジェンタの仕事は、歴史的な観点から、どのように評価すべきですか？

1970年代、ジェラルド・ジェンタはまったく新しいタイプの高級時計をつくることに成功しました。クラシックなゴールド製ウォッチの代わりに、頑丈で防水性に優れているながらエレガントな、金属製リンクのブレスレットを一体化した、スチール製スポーツウォッチをつくったのです。インチュニア SLをはじめとする作品により、ジェラルド・ジェンタはこの分野の大御所として不動の地位を確立しています。同時に、こうしたスチール製スポーツウォッチは、時代精神とも一致していました。仕事、レジャー、スポーツの境界がますます曖昧になっていました。そうした変化も、ウォッチの美学の形成に一役買いました。

なぜ、IWCは単にオリジナルモデルを再発売することはしないのですか？

最初はそうすることも検討したのですが、すぐにやめました。歴史的なデザインを再発売するだけでは、インチュニアコレクションに対して私たちが抱く気持ちには応えられないからです。エンジニアであり、デザイナーである私たちの遺伝子には、すでに存在するものをたえず改善して完璧なものにすることが組み込まれています。ジェラルド・ジェンタが長年連れ添った妻で、ビジネスパートナーであり、またジェラルド・ジェンタ継承協会の設立者でもあるエヴリーヌ・ジェンタが語ったところによると、彼女の夫はたえず自分のアイデアを発展させ、昔のデザインにこだわることはなかったそうです。最終的に、この言葉に後押しされ、インチュニア SLを出発点として、新しい現代的な解釈を加えることになりました。

その冒険によって、どこに行き着いたのですか？

こうして、インチュニア・オートマティック 40が誕生しました。この新しい自動巻きモデルは、1970年代以来の伝説と化している独特な個性あるデザインを受け継ぎながら、可能な限り最高の人間工学と美的な要求を満たしています。長年かけて、ケースのプロポーションを微調整し、非常に小さなディテールまで完璧にしました。また、1970年代以来、製造技法が大幅に進化したことも忘れてはなりません。新しいインチュニアは、ディテールが驚くほどハイレベルで、処理や仕上げの品質が群を抜いています。これは、たとえばポリッシュ仕上げとサテン仕上げを組み合わせた表面によっても明らかです。

人間工学の改善に関しては、どのようなことに取り組みましたか？

目標は、細い手首でも心地よくフィットするよう、完璧なプロポーションの40 mmケースをつくることでした。そこで、何年もの間、数えきれないほどのスチール製のプロトタイプをつくり、手首でどのように感じられるかをたえず確認し、ケースのプロポーションに改善を重ねました。インチュニア SLはブレスレットの幅が比較的広く、ラグがノーズ型なので、ケースが長くなっています。これを踏まえ、新たにミドルリンク・アタッチメントを開発しました。見た目は似ていますが、いっそう人間工学的に優れており、手首のフィット感が向上しています。もうひとつの要素として、ケースリングが若干カーブしており、これも人間工学を高めています。

ジェラルド・ジェンタのデザインの大きな特徴は、独特なベゼルですね。これは、新しいインチュニア向けに、どのように適応させましたか？

ベゼルのプロポーションと仕上げを微調整するために、多くの時間を費やしました。しかし、最も明らかな相違点は、本物の多角形のネジを採用したことです。インチュニア SLの場合、5個の凹みのあるベゼルは、単純にケースリングにねじ込まれていました。凹みの位置はまったく適当で、けっして同じ位置にはありませんでした。私は完璧主義者なので、これにはいつも困惑していました。新しいインチュニア・オートマティック 40では、5本のネジを使ってベゼルをケースリングに固定しています。ネジは技術的な機能を帯びており、いつも同じ位置にあります。

インチュニアの印象的な特徴のひとつに、レリーフのような構造の文字盤がありますね。この部分は、どのように改良を加えましたか？

Rf.1832と同様、インチュニア・オートマティック 40の文字盤でも、私たちが「グリッド」と呼ぶことにした構造が採用されています。この模様は、互いに90°ずらした線で構成され、軟鉄製のブランク材にプレス加工してから、電気メッキしています。これが文字盤の内側全体に施されていますが、チャプターリングの外側は滑らかなままです。IWCのロゴのプロポーションや文字盤上での位置、そしてグリッドに対する配置についても、1,000分の数mm単位で入念にバランスを取りました。もちろん、アプライドには夜光塗料を塗布し、夜間でも優れた視認性が得られます。

他に、どのような部分を完璧にしましたか？

少し見ただけではでは、ほとんど気づかないような無数のディテールを最適化しました。たとえば、ブレスレットの上部には、目に見えるピンを使わないクロズド・リンクを組み込みました。これにより、全体的な品質が高められると同時に、極上の仕上がりが強調されています。クリーンでシンプルなバタフライ・フォールディングバックルを採用したことで、ブレスレットの美しさが十分に引き出されています。もうひとつの例は、わずかにカーブした風防です。風防はウォッチの全体的なプロポーションにあわせて微調整されており、価値と洗練性を高めています。

新しいコレクションには、具体的にどのようなモデルがありますか？

インチュニア・オートマティック 40はステンレススチール製で、ブラック、シルバームッキ、アクアの文字盤から選べます。アクアは新しい文字盤カラーで、グリーンとブルーの中間の魅力的な色あいです。また、チタニウム製の他のバージョンも開発しているところです。IWCは1980年代にいち早くチタニウムを使用しました。この軽くて摩耗しにくい金属は、IWCのエンジニアリングと素材の専門技術を象徴しています。ですから、インチュニアとも完璧にマッチします。

ケース内部の機構は、どうなっていますか？

このコレクションのモデルは、すべてラチェット式自動巻き機構を組み込んだIWC自社製ムーブメント、キャリバー32111を搭載しています。パワーリザーブは120時間です。インチュニアの伝統にのっとり、どのウォッチにも耐磁性軟鉄製インナーケースが採用され、磁場が精度に及ぼす悪影響からムーブメントを保護しています。さらに、現代のスポーツウォッチへの期待に応えられるよう、インチュニア・オートマティック 40のケースは10気圧防水となっています。仕事にもレジャーにも最適な、用途の広いモデルです。

ご自身と同僚の皆さんにとって、開発プロセスはどのようなものでしたか？

デザイナーにとって、インチュニア SLのような、ブランドを象徴するモデルに新しい解釈を加える作業に携わる機会というのは、そう得られるものではありません。ジェラルド・ジェンタの成し遂げたことは、限りない尊敬に値します。私たちは、この作業に伴う大きな責任を意識しながら、細心の注意を払って作業を進めました。あらゆる目に見える変更点についてじっくりと議論し、特定の介入が正当化されるかどうかを確認しあいました。しかし、エヴリーヌ・ジェンタから、夫が生きていたら、きっと新しいインチュニア・オートマティック 40を褒めてくれたでしょうと言われたとき、このプロジェクトにそそいだ情熱と努力が十分に報われたと感じました。

## IWCシャフハウゼン

IWCシャフハウゼンは、スイス北東部のシャフハウゼンに拠点を置く、スイスの大手高級時計メーカーです。ポルトギーゼやパイロット・ウォッチなどのコレクションを擁するこのブランドは、エレガントな時計からスポーツ時計まで、あらゆる種類の時計を扱っています。1868年、米国の時計技師でエンジニアでもあったフロレンティン・アリオスト・ジョーンズが設立したIWCは、人間ならではの職人技と創造性、その最良の部分と最先端の技術および工程とを組み合わせ、時計製造に対する独自のエンジニアリングで知られています。

150年以上にわたる歴史の中で、IWCは精巧かつ丈夫で使い勝手のよいプロ仕様の計器時計や、複雑機構（とりわけクロノグラフとカレンダー機能）を組み込んだ時計をつくり、高い名声を得てきました。チタンやセラミックの採用の先駆者であるIWCは、現在、カラーセラミック、セラタニウム®、チタンアルミナイドなどの先進的な素材を用いた、高度なエンジニアリングと専門知識を駆使したケースも製造も行っています。

持続可能な高級時計の第一人者であるIWCは、責任をもって素材を調達し、環境への影響を最小限に抑えるための努力を惜しみません。透明性、循環、責任という3つの柱に沿って、このブランドは何世代にもわたって長持ちする時計をつくり、責任をもって製品を製造、流通、修理するためのあらゆる要素を継続的に改善しています。さらに、IWCは子供たちと青少年への支援に向けて世界的に活動している組織とも提携しています。

## ダウンロード

画像は[press.iwc.com](http://press.iwc.com)で無料でダウンロードいただけます。

## お問い合わせ

IWCシャフハウゼン

広報部門

Email [press-iwc@iwc.com](mailto:press-iwc@iwc.com)

Website [press.iwc.com](http://press.iwc.com)

## インターネットおよびソーシャルメディア

Website [iwc.com/ja](http://iwc.com/ja)

Facebook [facebook.com/IWCWatches](https://facebook.com/IWCWatches)

YouTube [youtube.com/iwcwatches](https://youtube.com/iwcwatches)

Twitter [twitter.com/iwc](https://twitter.com/iwc)

LinkedIn [linkedin.com/company/iwc-schaffhausen](https://linkedin.com/company/iwc-schaffhausen)

Instagram [instagram.com/iwcwatches\\_jp](https://instagram.com/iwcwatches_jp)

Pinterest [pinterest.com/iwcwatches](https://pinterest.com/iwcwatches)